

## 「活動を通して私が感じた、 地域活性化を図るために必要なこと」



森田 麻里

(紫波町)  
一般社団法人しわ・まちコーディネット  
事務局長

私は現在、「一般社団法人しわ・まちコーディネット」の事務局長をしています。私たち「しわ・まちコーディネット」では、地域課題の解決のために、潜在している地域資源（人・モノ・活動等）をつないで、効果的な連携を生み出すためのサポートやコーディネーターする活動を行っています。

少子高齢化、地域経済の停滞の中、多様化する地域課題解決のためには、行政、地域住民、民間企業、非営利組織などの地域構成員間の協力、連携、協働が不可欠ですが、私たちは実践の中でそれらをつなぐコーディネーターの必要性を強く感じて、その役割を担うべく法人を立ち上げ、様々な分野でコーディネーターとネットワーク作りを行っています。同じ課題でも、それぞれの視点や立場で中身が変わってきます。例えば、「地域活性化」

のためにハード部分の整備が必要という人と、賑わいがあればという人。人と人とのつながりが大切と考える住民と、コミュニティの関係が煩わしいと思っている住民。みんなの総意と言いながらも、総論は賛成だが、各論は反対……。

そんな中で、課題解決に向けて、意見のすり合わせや関係調整を図ることが重要になります。コーディネーターとして、実際に現場に行ってみて見えてくるのは「事実」、一緒に動くことで分かってくるのが「真実」ということを実感します。

今回、「地域の活性化を図るために、今必要だと感じていること」というテーマで、活動を通して私なりに現場で感じたままを、素直に書いてみようと思いました。

◇ ◇ ◇

一般に「地域を活性化しましょう」という場合、成果として、産業の振興、雇用の創出、定住人口の増加、地域間交流の拡大、地域コミュニティの再生などを目的とする、経済優先の量的改善をイメージします。数年前、私も単純にそんなイメージをもちながら、空き家や空き地が目立つ閑静(?)な商店街を「活性化させたい！」などという、今思うとおこがましい思いで、女子力をつないで商店街の活性化を図る事業、女性起業家長屋「ならいまち・こまち」を立ち上げ活動を始めました。活性化が課題となつて久しい商店街で、空き家になった友人の実家を借り、JTからの助成金を受けて家屋を改装し、「起業を目指す女性や、起業場所を求めている女性の活動拠点をづくり、そこに集まる個性豊かな女子力と地域の皆さんとの交流で賑わいを創出し、

商店街の活性化を目指す」という事業でした。

物珍しさも手伝ってか、地域の皆さんも早く私たちを受け入れて下さり、不足する備品の調達からイベントへの協力など、多くの方々の応援をいただきながら、勢いとノリで様々な取り組みをしていました。

そして、ちょっとひと息ついた頃、ふと素朴な疑問が……。

確かに町の人口は減少し、住民は高齢者が多く、普段の町中は閑散として活気もない。でも、お向かいの理髪店はいつも常連さんで賑わっているし、通りの食堂も地元で愛されている。少し先の喫茶店には、遠方からもお客さんが集う。お祭りで発揮されるコミュニケーション力も凄い。なにより、「なんか心地いい……」。

この安心感はどこから来るの？……。イベントや様々な活動で一時的な賑わいは生まれても、その先、何につながるのだろう？……。そして、果たしてこの商店街に活性化が必要なのだろうか？……。

◇ ◇ ◇

「地域を活性化するというのはどういうことか？」「何をもって活性化されたと評価するのか？」。あらためて「地域活性化」という言葉について調べてみると



「ならいまち・こまち」での、子育て支援と食育の起業コラボ講座の様子

- ① そこに住む人びとが地域の資源を活用し、生きいきとした創造的な生活を営んでいる状態、またはそうした目標に向かって努力している状態を指すのであろう（塩見譲 1988）
  - ② 地域の多様なステークホルダーが、連携を基礎に活動しつづけられること（河井孝仁 2009）
- という文言が……。

人口が減っても、商店がなくなっても、ここに住み続けたいという人たちが心地よく暮らしているこの状態は、活性化されていることになるのでは？……。実家を提供してくれた友人は今、跡地に家を新築中です。私たちと一緒に活動する中で、この町の良さを再確認したとのこと。

生きいきと楽しくしているところには、自然と人が集まりたくなります。「地域活性化」は、させるものでも、すべきものでもなく、そこにいる人たちが心地よく暮らすために、自分達ができることをしていくことで、自然になされていくものなのでは？

◇ ◇ ◇

私が思う地域の活性化のために必要なことは、

- ① この町で住み続けたいと思う気持ちと地域の良さを、次の世代に伝えていくこと。
- ② 次の世代のために必要だと感じた人たちが、地域の様々な立場の人たちとのゆるい連携と協働の中で、できることをまず始めてみるというちょっとした勇氣。外部の者はそれを後押しするお手伝いをすればいい……。

活動を通して思い、感じたことでした。